壬子六月吉日

琉歌集

琉球百控
乾柔節流

【史料カード】

SEQ番号	0730
所蔵元別分類番	伊波普猷文庫
史料番号	099.5 R98
標題	琉歌集 —琉球百控乾柔節流—
年代	
西暦	
形態及び数量	1 (27枚)
作成者	
宛名	
リール番号	
コマ番号	
注記	
特記事項	

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

此の歌集ハ友人恩河朝祐君の公務を帯ひて伊平屋島に出張せし折リ同島の某家所蔵の古本を写して特に予に贈りたるものなり

仲吉朝助記

琉歌百控乾柔節流

天河子の御神 天下り召しやうち
作る島国や世々ふさかる
あと一条継ぐむらし初や
太子吉東宮神の御作
作田吉の赤太子神 吉東神あん作

初段古ガ節
稲花咲出ち塵泥も踏ぬ
白ちや稲やつゐち拝む
根慶家かへ金轆立ちめ

計てつき餘桜ら雲の古い糸

中根田茶行　中城間切伊集村

蓬萊洲ハ島を萊洲れ

りきつ八清気や雲氏まつ糸

月影や月影ともく明ら影や知ぬ

竜脳粒らまや打わりく

揚　根田茶行

作根久宮く来りうくち内殿の一本

东や抻添く宮よいあめ

二葉ふめつる松せん老ら木盛までも

清哉石さん絶しやらハ花都の主加那志

浦添茶中　首里當知國吉村

青梅木の綠長ろ山ちりくりまた小根さ花

又白ちりく本小根花る

石那子此府の大衆成とても

御哉ふ之路ハ拝てあり

西原茶中　惠勝吉茶行　浦添方ら利　西原傍村

蜜花ともハ小花ものそ忘ぬ計り

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

雰え折向く笑て咲さ
花と雰の縁わくく海せ生に
瓶く毎ま清深ひやくくまへ
二月古蒼氷　沖縄那　ぞは
13 若る年の元そち暮るくれずみ
只折てい石れ菊え深垂
14 立つく志し　立く有ると
岩や巌ゟを端ひとつら家
前里之郡　尚徳王之時

15 天地根ま飛の鷲ゝと熊鷹ゝと
野原住ゟ小鳥く暖せ
16 玉の簾や白雲ま見るから
内まり今之ゟ世ゟ我や月小見ゟから
諸説　京之内朗庭村
17 志内とん家章の雪ゟの断
いつの夜え影て声け以暖わ那
18 志内とん去濱の打汐引波や
志内とん家章の園笑断

尾屋花

19 尾屋は出しく南風向く見てさ

端の浦と見てゐる里やみえぬ

20 尾屋森なくて那覇港見る事さ

窓し渡舟のやうに漬き

仲順花　中城間切仲順村

21 濃きなる花見しやうな月に照らさ

暁ともくるやなちやう

22 むかし思ひ花松あるを屋もく

涙は月影や曇くなる叔

三月花　柳花　読谷山間切楚辺村生 赤犬子作

23 柳は緑 花は紅 人は只情 梅は匂い

24 花の盛りも三月四月

月のさかりも十五夜のさかり

天川節

25 天川の池や千尋なささ

おれよりも深くおもくくおもておれ

26 天川の池に遊ぶ鴛鴦の
おもひ羽の契りや与所や知らぬ

東細節

27 東細曇り我浪やすもん
みやさおせと踊い我のとめ合

28 籬内咲ちゆる花の思くゐるか
分ぬ我もてるやりまやならぬ

29 首里那覇志公衆人や揃さ
嬉ちさそと里前清らさあち

蝶節　永吟節

30 東明に起く空向くみれは
綾蝶と我身の生れ替て飛はさ

31 飛立る蝶先よ待て列り
吾や花の本知らぬ何その列て行ちみほさ

十七八節　永吟節

32 夕雀り鳴ちゆ居ち居りかん
玉金使ぬおや求ふとめは

33 夕間篝と列てくちゆふ傍や

浅猿やわきもとりく行き　伊平屋嶋

34 安波普蒙掛斗　永伊平屋節

伊平屋渡立波や浪やれも済い

思渡前の大波小波

35 通水者

尾掛ち元の毛小蔵芝露打染く

通水の山尾花を織ある

36 汗たれ伊平屋嶽や浮よてと見ゆる

枕て浮ちる和合

通水節　伊平屋嶋

37 通水の山や鵠わ織て知て

染ると鞍と主と二人

38 伊野波節　本部間切伊野波村

伊野波兆石くへり苦い露別て登ら

まや角も石くひり走ちある

39 義理や昔掛りぬ生別

魚結離れしかまてあるまい　伊江嶋

40 東江節

東り明れは夜も明んとも

月とのちやかよる恋し夜半

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

41 東りかせちやうと湧上りともしく
飛くよ花ちや知志ちり
散山節
42 浅猿や浮世人ゆみも知ぬ
我身や此世界に一段思く
43 あらしの自のあらしや無き花ぞ根むかい
行逢て章の八一代にはいその
揚作田節
44 六段昔節揚節
二三月乃夜毎咲くよ遠ぬ
萬代田の稲や穂揃て
45 今日明て明日よ暮ハ暮れ
明日からの明日や明後日つちかを
大宜味節切
知念節
46 寅やう実茄子といはの通り茄子のい
実ミせ志ちて茄子嫁石ら
47 勢れかり二才衆二、三千とかおり
四五十ゟ上ち揃くいその
古波佐節
久米誌

48 久米の儀保ハ清月夜とく照る
世に月夜と行て思て来れ
49 高離り(タカハナリ)嶋てさしと渡る旅や
なれの行まわりまて あかい(アコマイ)
思納つ切　名護の主人村
50 名護の主人節
思偲ぬ先小今来ハ定離のあても
のよく此夜わ吊や今ん
仲村渠節(ナカンカリフシ)
52 仲村渠の戸ま(?)ハ提(サゲラ)く

あふやうめん思ハ来れ思も
53 中島の小村人繁さあもの
あふやうわん思く思て来れ
七段昔節　物部
手拍節
54 手拍子居待ちや満潮根よけ
節や暁の鳥と知りめする
55 漣(サナミ)の立も如り来浜千鳥
恨帰無駄やめつてかへら

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

七尺節

56 七尺石塔の花摘る門や
髪いかりの雨さへ弱れ

57 長英やあ田てめんちやさや米くぬ
中末代一ヶ月の寸法

子持節

58 あけやう戻ちやちやうら思切や成ぬ
引さりて行き我身肝や

59 安堂やふ自由らぬ浦身やてりゝや

悠成先ふらぬ云屋哭ふ

中風節

60 月屋むりし岩月屋寒のか
のろく行物や人乃まくろ

61 彼は立ち見ふ立ち
物思れくと成ら心気

述懐節

62 桐痛生れや痛とかかりよは
屋冨ふ志ゆくつわの彼と歎そと

63 浮舟よ安く風流さへうろ
頃出きぬ間ハ浮世更め
満開花　大浦時花之事
64 八段菖蒲鵜部
菱持眼も眼さめ冬乃眼も眼さめ
満開主乃眼も覚ん眼さめ
65 大浦七間切鬼界久米切
徳永良部其ハ論那　雪の地社内
66 織衣庵節
紙衣庵羅之姥やゝゝ年の世も果報
掌衣浦
聲衣庵衣□□□

明年此世や増てよくの世果報
67 宝古小一ツ有物や寺の坊主の撞鐘や
又も有物や□□鳥風籏や
石屏風節　八重山　西表浦
68 石の屏風立し七重八重内に
惣世造舟浮て人果へ
座久名節　座久浦
69 座久名本の鳥や口ハ八数のふる
カラ～座口ハ八神の□□

屋久名嶽見れは　霧雨かゝらん
霧雨やあらぬ我袖の涙

津堅節　　勝連間切　津堅村

一棹
津堅と渡名喜渡り遊て見渡る
共見と見ゆれはちよおもへくふかし
保竹の文章や相見やあくみ
津堅赤ねしやふふや折よく

五段覇節

赤謝仙風節
安多安和報の附報の尊やちやらん見ぬ
赤謝の報告つきへ泥と附き
銀夕瓶彩や連くや思ぬ
命果報重幸ゆくち待れ

港原節
十尋屋に座て八尋屋に居ても
きゝもて肝さらの按司も下司も
金ちやてても銀ちやてても
肝米抜かしとかきりさらめ

其万歳節
手渡村

77 天の川り星や嶋々ととてまゐる
今三ツ星や わかさてまゐる

78 千里波海まても照る月やひとつ
彼を詠らぬ今日の月雲

菝葜垣節

79 行るかきてやんまも清夜更て挑い
どくんまも来めくへやて夜て行き

80 道端思きしや袖振ゆまかは
節んきしあって里にまかり

英屋節

81 梅や弁て やんまも清心多あまり
押て小結て 清係当る

82 加子行御府前て御係ゆ客て待て
我胴屋ゆまわ胴の摘と見ゆる

十段霧節 詠 花風花 旅ま謝風花 那覇出 楠美棲宮

83 来んち出かれらしや操て花まる

84 御船思縄ゆまも風や表纜
一の帆笑帆中吹つゝ毛清風

関得大君御前節之風

白雲節　菊見ん若しは去

85 雷ぶも鳴る夏の夜の風や
雨雲に座よる稲妻に渡やらんぬ

86 村雲の中に時やけて見らぬ
さやかてる月の光り座よか

果報田節

87 我竜ぶく鍬(クワシロラバ)ハくるまぶ(アブシ)
くるし田の稲葉畔枕

88 成如事思く朝夕悲して志ゆまで
いつの川ら済所つきも計り

立雲節

89 何り立つや世界難恋も捨くあい
影て明方の近くなるよさ

90 惜む夜や更く明雲や立く
まや又のつきまいん別らさしめ

孫勤節

91 孫勤代のむかし緑く戻ち今よ

諸方人の風切払ふ旅しや
道敷恩巻奇風て払ふ
於て位勤世の近く成せ
十一段恩ふ節　金武節
萬や金武萬小弁屋安富祖嶽　金武百切
屋嘉や嘉良甚垣に植や恩納
萬の若萬や盛揺ての栄せ
弁嶽若弁やまの見清栄せ
恩納節　恩納百切

恩納嶽登て押下り見れば
恩納と谷茶の手振清さ
恩納松下に禁止の碑のあもの
恋忍ぶまでの禁止やないさめ
謝敷節　玉城百切　謝敷村
謝敷板干瀬に打ちへ引く波や
謝敷女童の目笑歯ぐき
謝敷女童たもれまさい姿
つらいかなを見てやくさへ

源河節　羽地間切源河村

源河走川や瀬か湯か水か
源河女童の御浴（スデ）所

流るる水に綸（シカテミ）くくく
花笠清き掬（スクフ）く見ちやや哉

邊野喜節　國頭間切邊野喜村

伊集の木は花や何い清らさ咲（シテ）い
吾ん伊集のごと真白咲かな

山乃木の緑き銅は夕比
どの本の姪き銅比と夕

家毎の姪さ二十（ハタチ）家毎

十二段花節

大兼久節　名護間切大兼久村

名護は大兼久馬走ち嬉（イシヤ）しや
舟走ち嬉（イシヤ）しや我浦添

名護乃番所や雑（カラマツ）ちちや雪海れる
東川と槐と茂い茶へ

與那節　國頭間切與那（ヒフ）村

與那高る坂や汗はてて登る

106 世菊と云人成八重さうちら
首やちやらん黒とも京くやよい
萩花小歌本や名ちよれ

本部揃節　本部間切

107 共に高きあ婦の神招しち招ついて
紙まく世まは成八清う高きよれく

108 地頭代御しらりまの御取ゑちや座らぬ
徳方世の神遊このちよ清き

元散山節

109 深く深らハ浅地節ならんちやきちやう
烏若羽のしもは深れし

110 夜咲る花や白さ鼻知る
かな志志ゆ身や抱き知るよ

大浦節　久志間切大浦村

111 大浦湊小船頭花ゆへゐちやう
衛蒲葡戸小や国断

112 船や出ちゆらは朝潮よ出ちて
海党河もしこうち待清ゑく

十三振節節　安慶名親雲上 金武按司 伊舎堂村

113 思ひ行路の山の端出る月よ
儒しさる恋の想はや

114 思て行心共はやるともも
幾とりめかわくや恋の習や

沖泊節　大見武親雲上 儀保村

115 沖泊寺坊田と緑よる
同よ緑よる浜の寺前

116 屋嘉部てやん木前御神

志はし苗めしらされ浮しは欲の

湊節

117 湊清さや湖平底みると
泊清さや那覇の泊

118 舟の綱やらんくるとる艘船
ぐめりんく出て見れは山の木たら

蜘節　大宜味間切

119 深山蜘てやん木経るくまへ
弟女小蔵す母 頼み尽ち見ら

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

120 経る摘名付たる南風向く見たる
湧水浦と見る里屋見てぬ

渡那覇節　金武間切 渡那覇村

121 上り登り流れる渡那覇のろくもへ
下り下り流れる川平まるの戸

122 畔織まれや知やけれ共上る
我二十比小篤れるまつ

十四段波節歌

123 赤木名節　金武間切 赤木名村
赤木名ちやの早たいい飄てと

124 萩深り飄てとわ無露や庭の
吉の宿庭るかひきてしれ庭る
萩深に飄く無無露や庭ちやふ

浮鳥節　沖永良部嶋

125 梅元卑事み永良部の鳥も
地やし離く浮鳥小

126 長統織世蒲小夕気ふ新ハ結く
蘭まさつくりつつ待きやう

池当節　沖永良部嶋

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library

127 池のよの蝶水に影揺ち
玉金姿節に扣り来
128 永良部ならや送ん破されし
赤さ親縁田や宮
浦添節　大路
129 恵し出里と浦添ぶみ秋や
冬の秋の二長あくち移き
130 旅や濱やとり夢の枕かけつらむ
寝覚えつゝね祕蔵の傍線

何体句ぶ　多城金節　文吉詠
131 多城らはまきり浦添鉾旅立つかりや
浪之魚の水離きかりてまみない
132 浮名立つは浮名出て主席金港水ぶ流
んらぶ庵ら節ら白かな白切つけ　我らかやう
133 十五夜波節　伊計離出　与那城間切伊計村
伊計離嫁や戒欲や何まらい
134 大那川出ぶ滝瑞の厭し
勝きの鳩や通い欲あまらか

和仁屋門乃湖茶蹴ハ歌し

高嶺節　　与那城あ切ち高嶺節

135 高嶺湧ぬ物知らし不
了や物知ゐらん渡ち絡れ

136 すみ舟標舟乃浮ち浪海届れる
兄ゝしや浦切しやのよて志や届ら

久高節　代朱花

137 久高思里や無編様のい米ら
いちやし思ゐち三年ゞ海の　筆

138 久高思さとの家ん志やら舟や
伊集乃木とや枝ら組染ゐらく

八月節

139 八月の月や惣らぬ月あいもの
安母志やれん惣ゆい節ゑ遊ひ

140 八月夜十五夜ゐみ好やい見まくて
天久白浜御月乃清さ

大田名節

141 大田名地嫁やみいみしや喜ゆまら　伊平屋鴻

120

戀あし銀道の路忘厭く

142 田名小城鴨続羽切鴨い

田名の女童の情切く

八重山新城節

143 十六夜節

戀花節

鉄頂登く南風向く見れまそん

まゆの布晒し見捨らるその

144 高根久ま登く西向くみれハ

行帆舟思ハ真帆と見るらん

八重山小濱節

小濱節

145 小濱てる語やこの敷那語やれハ

大嵩は紫雲で小濱みうらち

146 大嶽に登て押下い見れまそん

稲粟のなりら今度世果報

同小濱節

湊越節

147 獨り清の娘請支持ち

朝洋の夕洋うれと徐ら

148 女童てらこ女童十七つとこ女童

抱れらし調ての女童算用介

本東節

東り打向く飛ぬ綾蝶は

諧徐て蝶言遣頼ま

哀執見ても見飽ぬ花の白浜露く咲て

坂本節　　出之浜

坂本乃仲島やらん古雨芳浦から

上清らつ蘭の咲

志弁さらん垣や押わく入ん

明てさのさゝぬ御前の園

十七八節

大西の特やうまくちやうらて数ある　　特節　　任江嶋

親嶋若者やきれて数ある

鳴もさふくと蘭色そめくと

船京きあみ牛綱ひとゐて

古仁屋節　　東　万切之内　古仁屋村

久仁屋乃石らな居らなて八重の分ちゆし

親父子親部とちや混へ吸八まく

親子子親部の鞍之切銀

夜る昼んちゃ哀れきちゃ恨めしく

157 冨里節

冨里ぬ下の高嶺 夜更(ヨフケ)ちらちら来もて 伊江島

158 腰押(ヨハテ)風涼身冷(ミヒヤヨル)ゆやらの

我冨里濱や水淵や安しぬ

渋小端好く撰(ヨウテ)ちらぬん

仲染節 伊江島

159 仲染(ナカンカリ)畠担て風畠(ハタケ)

冨里屋乃後ふ一切あらぬ

160 冨里屋後ふ田畠のあらて

原の所底ひ見飽付くい

161 早節ゆ久節 東 百切之内 京 村

前ゆ久恩遇りて付の冨里ふ付り

又見と住乃藻(モ)列(ツリ)燦(クハツ)草

162 七重あしら冨里ふ料(トキ)贈(ハシラ)く組者ちれく

冨と原隣ひ所進へらひ兎の

163 十八段節節 仲里節 久米島 仲里間切

関神里や花咲かて兎の

164
咲かば一枝持ちくれ
花と思ゆ里が花持ちくれ
此川までも先流し泉海あれ

白瀬節　久米島
165
白瀬走川に流るる桜（サクラ）
掬て（スクテ）思里に貫きやりはけら

166
赤糸貫花や里に打ちかけて
白糸貫花やよそにくいら

半田昔節　久米島

167
半田昔なりや漆割（ンチヨ ハチト）と行きて（ユカヲ）
三千田（サンミツ）三田（ミマシ）其の行きしく（クヘ）

168
半田間ぬ下い三千田三田
かやいい見たかや乃三千来

打豆節　久米島

169
打豆と云豆成る山の針穿ち（クワチ）
我が若さがかちなくしてひなきい

170
天附ぬ浦波の今日洋て兵の
馬の鞍覆（クラ ヲツテ）て其世なさりか

170

171 出砂節
出砂蝶やい頭に抱ちゑゝる
走り抱戯る渡名喜里前
渡名喜親雲上

172 里と寝汁衣重而別ち袖ぬらち
忍事ともぬ涙汁利

173 十九段端節 思每河原 大城
雨河の流や取ちやすもり
深み浅るかけゐ自由も成ぬ

174 一年に一夜天の河渡る
星の上契て待ちへりしやの

175 原者節
来て来ちや来て来迎ハ退け
我等童のぬ好る含が
西原間切 我謝村

176 打寄しやハ里が挙りし我独や
里が挙りし我独やいきやしゆら

177 世那覇節
世那原乃銀川に天振り走やる乙女
陪万年の中に遊び成さ
那覇門 陸原村

178
長濱の真砂讀やならぬも
云ち尽くさぬ君か恵と

垣花節
玉城間切
垣花村

179
圓覺寺御門の鬼佛かなし
わ宿の慈悲みや成ち給れ

180
平良高嶺の夫婦樋川の流れや
おりゝ水取と女童と別ぬ

屋嘉名節
勝連間切屋嘉名村

181
屋嘉名森成土樹のやうにあゝりませ

182
おれゝかゝかへ東風の音しませ
屋嘉名くさてさの下ね涼て
夏や涼しさと抱しやの

百名節
玉城間切百名村

183
二十四端節
少年の時今ゝ寄取出た
中道見るや淀てやさ

184
中道見るややゝさんゝすゝや
かくらむさしらすゝ人きゝや志らか

芋葉節
真和志間切安里村

185 芳乃葉や思し舞の葉や拾ぎ
蘋蘩葉のことに採て出れ

186 安里八幡の松拾る梺
知れり寄は行と里と別ぬ

棉花節

187 木棉花咲て木棉摘置て
布漬く織は今やくる御

188 園芸は中子まぬ白し洒ち
旅は海へる里は鋼衣袴

満作節

189 大粒豆も満作ゆんまま豆赤豆も満作
今年来年満作さめくぢちぬ

190 麦の穂むかく粟の穂もむかて
稲の稲むかくも稔生果報

作栄節

191 今年作る米やまく玉のなさめ
南の風君押て西の畔し枕ゆ

192 西風君押て南の畔枕

わか邦にて来きや得来と撰る

琉哥百控乾柔節流 終

195

百年蔵えの打笑ミ心まゝしきて

ちと世末への志ゝやしさんめ

194

道広き御代に生れあはしやし

哥撰玉拾く分合て撰え

大清乾隆六十年 乙卯 正月十日 撰写之書

于年 旧六月十五日写之

大正十四年五月十日写了

[illegible]

伊波

賭博常習の巡査

現行犯を押へらる

大示威

鶴見の怪事件

狂言に誘き出され

四千圓奪はる

Digital image © 2009 University of the Ryukyus Library